

# 移住労働者の現地言語能力についての考察 －雇用許可制韓国語能力試験の模擬試験結果から－

松崎 真日・吹原 豊・磯野 英治・助川 泰彦

## 1. はじめに

本研究は、国を越えて就労する移住労働者の移住先言語能力（以下、現地言語能力）に着目し、客観的な指標からその現状の一端を明らかにしようとするものである。そのために、本稿では、移住労働者の受け入れが制度化されている隣国、韓国における移住労働者の韓国語能力の把握を目的として考察を進めることとしたい。

2019年6月末現在、韓国で非熟練労働に従事するためのE-9の在留資格で滞在している外国人数は、278,560人である<sup>1</sup>。2015年以降は、27万人台で推移しており、外国人労働者の受け入れが安定していることが推察される。E-9ビザは雇用許可制（EPS: Employment Permit System）のもとで就労する外国人のためのビザであり、最長で4年10ヶ月間韓国に滞在することができるものである。この決して少なくない外国人労働者は、長期間韓国に滞在し、社会を構成する一員になっていると言える<sup>2</sup>。

本研究では、このEPSにより非熟練労働に従事する外国人労働者（以下、EPS就労者）の韓国語能力を把握することを目的とする。そのために、韓国でEPS-TOPIK（Employment Permit System-Test of Proficiency in Korean）の模擬試験を行った結果に基づき、韓国に滞在する外国人労働者の韓国語能力について考察する。

外国人労働者の受け入れ先進国である韓国の状況を、政策・制度と韓国語習得の観点から考察することは、日本でも新しく開始された在留資格である特定技能に伴う外国人労働者の急増に関して、日本語教育の観点から検討する有益な情報を得ることにつながるものであると言える。『日本語研究』においてこの問題について論じる意義もそこにある。

## 2. EPSについて

現在、韓国社会において一定数存在する外国人非熟練労働者にとって、韓国で働く制度的基盤になっているのが雇用許可制である。雇用許可制による外国人の受け入れは2004年に始まった。韓国では、この制度において外国人を研修生や実習生としてではなく、労働者として受け入れている。同制度の受け入れ対象国は、韓国政府と二国間で了解覚書を締結した国々に限られ、労働者の送り出しと受け入れに両国政府がと

<sup>1</sup> この数は、「法務部出入国・外国人政策本部 2019年9月号出入国外国人政策統計月報」に記載されているE-9ビザによる韓国居住者数である。したがって韓国で就労が可能な韓国系外国人に発給されるF-4ビザによる居住者はこの数値には含まれていない。

<sup>2</sup> 同時期に留学ビザ（D-2）で韓国に滞在している外国人数は131,289人、結婚移民ビザ（F-6）は129,459人であり、それぞれ雇用許可制外国人労働者のためのE-9ビザのおよそ半分の人数である。このことから、韓国内の外国人のうち雇用許可制外国人労働者が占める割合の高さが分かる。

もに関与することでブローカーなどを排除する仕組みになっている。2019 年 11 月現在、15 カ国との間で了解覚書が締結されており、2015 年以降は 27 万人ほどの外国人が韓国国内で常時就労している状況にある。

雇用許可制においては、渡韓前に韓国語能力を評価することで、一定水準以上の韓国語能力がある者のみを受け入れるようになっている。この点は、雇用許可制以前には見られなかった点であり、雇用許可制の大きな特徴の一つであると言える。この韓国語能力の評価は、雇用許可制のための特別の試験である EPS-TOPIK により行われている。

### 3. EPS-TOPIK の概要

EPS-TOPIK は、聴解試験と読解試験からなっている。それぞれの試験時間は、聴解試験が 30 分、読解試験は 40 分である。配点は各 100 点で合計 200 点満点である。問題の回答は聴解、読解を問わず全ての問題が四者択一の選択式である。

表 1 EPS-TOPIK の問題形式

出題分野	問題数	出題方式	配点	試験時間
聴解	25	四者択一	100 点	40 分
読解	25	四者択一	100 点	30 分
全体	50	四者択一	200 点	70 分

合格判定は、聴解と読解の総合点に基づいて行われる。200 点満点で 80 点以上、40%以上の得点率であれば合格と判定される。総合点で判断されるため、たとえ聴解が 0 点であっても、読解が 80 点以上になれば合格と判定される。

次に、問題の出題内容と形式である。出題内容については聴解と読解についてそれぞれ、「主要項目」が挙げられ、その下に出題方式が「細部項目」として設定されている。それぞれの主要項目と細部項目は以下の表の通りである<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> EPS-TOPIK 公式ホームページ (<http://eps.hrdkorea.or.kr/epstopik/epsHomeIndex.jsp>) に掲載されている出題基準を参照。なお、韓国政府は EPS-TOPIK のための学習に役立つ情報をホームページ上で公開している。具体的には、『公開問題集』と『韓国語標準教材』である。特に公開問題集は 2012 年以前にここから問題が出題されていた問題プールでもあり、EPS-TOPIK の問題形式や難易度をうかがい知ることができる貴重な資料になっている。

表 2 聴解の主要項目と細部項目

主要項目	細部項目
音と表記	・単語 ・文 ・数字
視覚資料 (産業安全、職業関連内容を含む)	・写真と絵についての正確な説明を選ぶ(絵を見て適切な説明を選ぶ問題) ・対話および文を聴いて適切な絵を選ぶ(説明をきいて適切な絵を選ぶ問題)
対話 (産業安全、職業関連内容を含む)	2人の対話で後に続く内容を選ぶ(あいさつ、日常生活、作業関連内容等)
対話と話 (産業安全、職業関連内容を含む)	・2人の対話を聴き内容把握 ・話を聴いてその内容把握

表 3 読解の主要項目と細部項目

主要項目	細部項目
事物と状況説明 (産業安全、職業関連内容を含む)	絵、写真を見て適切な文を選ぶ
語彙および語法 (産業安全、職業関連内容を含む)	空欄に入る語彙および文を選ぶ
実用資料の情報 (産業安全、職業関連内容を含む)	・各種表示板、案内板に含まれる情報を理解する ・産業安全表示板を理解する
読解 (産業安全、職業関連内容を含む)	・説明文を読み、絵を選ぶ(産業安全に関する絵) ・説明文を読んで答える

#### 4. 先行研究

本節では雇用許可制労働者の韓国語能力に関する研究の中で、本研究の目的に関わる2つのタイプの研究について取り上げ、本研究の意義を明らかにしたい。1つ目は、EPS-TOPIKの試験結果を分析した研究である。EPS-TOPIKについて議論することは、外国人労働者の韓国語能力の評価の信頼性や妥当性に関わるものであると同時に、外国人労働者の韓国語能力の実態にも関わることでもある。その意味で、本稿にとってこれらの研究は重要な関連研究であると言える。2つ目は、すでに韓国で働いている外国人労働者の韓国語能力を把握しようとする立場の研究である。EPS就労者の数は、

留学ビザや結婚移住ビザで韓国に來ている人々よりも多いにもかかわらず、その韓国語能力の実態を分析する立場の研究は、多いとは言えない。以下にそれら2つのタイプの研究について見ていきたい。

#### 4-1. EPS-TOPIK に関する研究

初期の試験実施に関するものとしては、김유정 (2008) がある。この論文は 2005 年から 2007 年までの EPS-KLT に関するデータを利用し、当時の試験実施状況を明らかにし、課題を探究した研究である<sup>4</sup>。この研究からは、試験の初期において、国や実施時期により合格率が大きく異なっていたことが分かる。このことに関して、김명광 (2011) も同様に、韓国産業人力公団の資料を利用して 2007 年から 2010 年までの試験を分析しており、同様のことが指摘されている。

最近の研究では、이미혜 (2016) が注目される。この研究は、2007 年から 2015 年までのデータに基づき、試験の実情と課題を探究したものである。この研究においても前出の2つの論文同様、試験の合格率が年度により大きく異なることが指摘されている。例えば、2012 年の合格率は 38.6% であったのに、2 年後の 2014 年には 18.2% と半分以下に合格率が低下したと述べられている。この合格率低下の事実に関しては、EPS-TOPIK の出題問題が非公開であること、問題ごとの正解率などの情報も非公開であることなどの理由から、正確な原因を指摘することは難しいといえよう。しかしながら、複数の国々で年に幾度もの試験が実施される安定的な試験運営があることを考えるならば、出題された問題の難易度のばらつきのみが原因とは思われず、入国待機者の増大や不足への対応など、他の理由があるものと理解することもできるだろう。

以上、EPS-TOPIK の試験結果の分析に関する研究を見たが、EPS-TOPIK の試験結果からは、韓国語能力の評価において柔軟な運用が取られている可能性を指摘できる。その意味でも外国人労働者の韓国語能力の実態の把握は重要な課題であると考えられる。

#### 4-2. 外国人労働者の韓国能力を把握するための研究

このタイプの研究としては、김익수・손현화 (2011)、류성기 (2015) 等がある。김익수・손현화 (2011) では、外国人労働者とのインタビューにおける発話を取り上げ、複雑さの観点から分析を行っている。実際に録音した外国労働者の発話を見ると、単文においては滞在期間や国籍による違いは確認できなかったものの、複文においては滞在期間や国籍により複雑さの程度に違いがあることが指摘されている。さらに、ベトナム語母語話者とシンハラ語母語話者の比較からは、シンハラ語母語話者のほうが韓国語母語話者に近い複雑さを持った文を発話していることが分かったという。外国人労働者としてひとくくりにされがちではあるが、それぞれの母語の違いは韓国語習得に大きな影響があることを示している。

<sup>4</sup> 当時、現在の EPS-TOPIK は EPS-KLT と呼ばれていた。



류성기(2015)は、外国人労働者の韓国語発音の実態を把握する目的で、質問紙を通じて発音上の難点を調査している。調査結果をもとに、外国人労働者自身が難しいと認識している発音を抽出しているが、これは外国人労働者自身の認識にとどまるため、客観性の面で限界があることが惜しまれる。

また、吹原・助川(2015)は、在日インドネシア人労働者を対象に日本語による OPI (Oral Proficiency Interview) を行った結果をもとに、在韓インドネシア人労働者の韓国語習得との比較を行い、日本語においても韓国語においても総じて習得が非常に緩やかに進むと述べている。さらに、同論文では、日韓の調査対象者の中ごく少数の中級者に着目して分析を行い、その共通点を挙げる一方、相違点として韓国の方がフォーマルな学習機会に恵まれており、その効果が窺われると述べている。ただし、同論文において、日本語に関しては OPI という客観的な指標が用いられているのに対し、韓国語に関しては中級者の判定がその成員が属するコミュニティ内での評価であったり、調査協力者(韓国語通訳者)によるものであったりするため、評価の客観性の点で問題が残る。

以上、2つのタイプの先行研究を見てきたが、外国人労働者の韓国語教育の研究においては、外国人労働者の韓国語能力を直接評価したデータが使われることが少ないことが指摘できよう。先行研究で使用されていたデータは、ニーズを知るためのアンケート調査がほとんどであり、外国人労働者の発話や作文データ、また彼らに模擬試験等を行った結果などの、直接的なデータによる議論が難しいことが推察される。これは寸暇を惜しんで仕事をしている外国人労働者に協力を求め、長時間にわたるデータ収集を行うことが困難であることが一因であると考えられる。他方で現在、外国人労働者の数が留学生や結婚移住者よりはるかに多いことを考えると、外国人労働者の韓国語能力の実態把握が極めて重要な課題であることも疑う余地のないところである。

上述の研究以外に、外国人労働者の韓国語教育や学習の改善を念頭においた研究も少なくないが、議論の前提になる外国人労働者の韓国語能力については、不明な点が多い。EPS 就労者が韓国入国後、入国前の韓国語能力を維持、あるいは向上させているのか、向上させている場合はどのような点で向上しているのか、苦手なことは何か、等々の疑問が浮かぶ。しかし、管見の限り、こういった疑問に答えるだけの研究が蓄積されているとは言えない。本研究は、EPS 就労者の韓国語能力を把握するための一助となるよう、インドネシア人労働者を対象に EPS-TOPIK の模擬試験を実施し、そこから EPS 就労者の韓国語能力について検討しようとするものである。

## 5. 研究方法

2019年4月末から5月初旬にかけて、韓国の京畿道安山市において、インドネシア人労働者を対象とした EPS-TOPIK の模擬試験(以下、模擬試験)を実施した。試験の実施にあたっては、安山市内にあるインドネシア人キリスト教会の協力を得た<sup>5</sup>。模擬

<sup>5</sup> 礼拝当日、信者に対し牧師から本研究の紹介があり、それに引き続き筆者らが研究協力の依頼を行

試験を受験したのは、EPS 就労者 19 名、非 EPS 就労者 15 名である<sup>6</sup>。受験者は同教会の信者だけではなく、その信者の友人や同僚などが多く含まれる。そして、教会での礼拝後、または勤務時間終了後に模擬試験を受験した。試験会場としては安山市内の貸し会議室を主に利用した。なお本稿では、雇用許可制の枠組みの中で就労しているものを対象としているため、今後は 19 名の EPS 就労者のみに絞って分析、考察を進める。

模擬試験問題は、公開されている問題プールから出題した。問題プールは、聴解及び読解についてそれぞれ 960 問が収録されている。収録問題は、表 2、表 3 のように問題の主要項目ごとにまとまって収められている。また各主要項目の下には細部項目があり、その細部項目ごとに問題が配列されているが、基本的に単純なものから複雑なものへという順に配列されている。

2013 年以降、EPS-TOPIK の問題は非公開になってはいるが、この問題プールに沿って出題が続けられていることはホームページにも明記されている。このことをふまえ、今回の模擬試験問題は問題プールから出題することとした。問題プールには聴解と読解がそれぞれ 960 問ずつ収録されているため、どの問題を出題するかが模擬試験問題の信頼性確保の上で重要であると言える。そこで、問題の抽出にあたっては、次の 4 点について考慮し、抽出方法を検討した。すなわち、①研究者の主観により出題問題を選ばないこと、②問題プールの問題収録数に沿った比率で出題すること、③すべての主要項目と細部項目から出題すること、④難易度についても様々な問題が含まれるようにすることである。この 4 つの事項をすべて満たす方法として、問題番号 20 番から 40 問おきに問題を機械的に抽出し出題することとした<sup>7</sup>。

試験時間は、実際の EPS-TOPIK に合わせ、聴解 30 分、読解 40 分で行った。聴解については問題プールの音声を利用し、スピーカーから音声を流す方式で行った。なお、問題プールの全ての指示文と選択肢には英語による説明と、韓国語の発音がローマ字で付記されていたが、これらは全て取り除き、韓国語のみの試験問題紙を作成した。ただし、問題の指示文については、口頭でインドネシア語の翻訳を伝えた。また、EPS-TOPIK ではマークシートによる解答を行っているが、模擬試験では解答用紙に番号を記入する方式をとった。

## 6. 模擬試験の結果

模擬試験を受験した EPS 就労者 19 名の模擬試験の得点結果を、以下の表 4 に示す。

---

った。受験者のおよそ半数は礼拝当日の午後に模擬試験を受験し、残りの半数は翌日および翌々日に受験した。なお、研究協力者には薄謝を進呈した。

<sup>6</sup> 本稿における非 EPS 就労者とは EPS のような正規の手続きを踏まずに韓国で非熟練労働に就労している者である。EPS 就労者は 20 代前半から 40 代前半までの男性で、職場での韓国語使用は指示を聞いて対応することが主な限定的なものであった。韓国語の学習機会について見ると、教会の日曜礼拝後に韓国語教室が開かれているが、今回の対象者の中で継続的参加者はごくわずかであった。

<sup>7</sup> 聴解、読解ともに、問題プールの 20 番、60 番、100 番...のように抽出した。

表 4 模擬試験得点結果

聴解	83.2/100 点
読解	67.8/100 点
平均点	151/200 点

EPS 就労者は、聴解の平均点が 83.2 点、読解は 67.8 点で、平均点の合計が 151 点であった。平均正答率は 75.5%であり、合格ラインの 40%を大幅に超える結果となった。次の図 1 は、EPS 就労者 19 名の模擬試験得点結果を個人別に表したものである。図 1 から分かるように、合格ラインの 40%に達しなかったのは c だけであり、その c も 72 点とあと一步の得点であった。

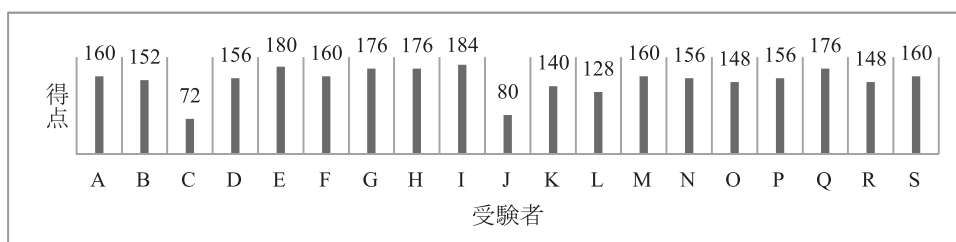


図 1 EPS 就労者の個人別得点結果

次に、試験分野別の受験者の得点を見てみたところ、表 5 のようになった。表 5 の灰色のセルは得点率が 40%未満であることを示している。なお、読解の得点が 40%に達しなかった者は 2 名(c と j)であったが、j は聴解試験で 48%の得点率であったため EPS-TOPIK の合格ラインには達している。

表 5 模擬試験受験者の分野別得点数

受験者	聴解	読解	合計	受験者	聴解	読解	合計
a	96	64	160	k	72	68	140
b	92	60	152	l	64	64	128
c	36	36	72	m	88	72	160
d	80	76	156	n	92	64	156
e	100	80	180	o	80	68	148
f	84	76	160	p	88	68	156
g	100	76	176	q	96	80	176
h	100	76	176	r	84	64	148
i	100	84	184	s	80	80	160
j	48	32	80				

## 7. インドネシア人 EPS 就労者の韓国語能力

ここでは模擬試験の結果、正答率が特に高かった問題と、反対に特に低かった問題について見ていくことにする。

### 7-1. 聴解能力

聴解試験の正答率は、表 4 で確認したように 83.2%であり概して高かったといえるが、何ができて、何ができなかったのかを確認することで、インドネシア人 EPS 就労者の韓国語聴解能力を考察することとする。また、その際、韓国語能力に関する標準的な指標である『国際通用韓国語標準教育課程』の能力記述を参考にする。

はじめに、特に正答率が高かった問題（問題プール番号 60、140、220、260、300、620）であるが、これらで問われているのは、音声と文字を対応させる能力（問題番号 60、140）、数字、動物、乗り物といった基本的な語彙能力（問題プール番号 220、260、300）、「いくらですか」といった基本的な定型表現（問題番号 620）が該当する。

つまり、EPS 就労者が十分に遂行できることとしては、音声と文字を対応させること、よく知られた動物について韓国語の言い方を知っていること、交通機関に関する語彙を知っていること、数字を聞き取れること、値段の尋ね方のような日常生活で頻繁に使用する表現を知っていることであった。このレベルは、韓国国立国語院が公表している『国際通用韓国語標準教育課程』を基準に見た場合、おおよそ次の 1 級の記述（김중섭他 2016:239）に相当すると言える<sup>8</sup>。

#### （目標）

日常生活で起こる簡単な対話と定型化している表現（挨拶、感謝、謝罪など）を聞いて理解することができる。

#### （内容）

- ・韓国語を聞きある程度音韻を区別することができる。

加えて、語彙について 김중섭他(2017)の付録語彙リストを参照すると、交通機関を尋ねた問題（260）中の「バス」という語彙は『国際通用韓国語標準教育課程』では 1 級である。アヒルについて尋ねた問題（220）では、正答の「アヒル」が 3 級、誤答の「イ

---

<sup>8</sup> 引用部分の下線は筆者によるものであり、本模擬試験問題で問われた部分に対応する部分を示している。『国際通用韓国語標準課程』は国立国語院により行われた長期の研究プロジェクトの成果物であり、検定試験や様々な学習対象者ごとに個別に作られている学習レベルの標準化を目指した報告書。多くの韓国語教育研究者により策定されたものであり、信頼に値する基準であると言える。本報告書では、韓国語の学習レベルを 1 級から 6 級までの 6 段階に区分しているが、1 級を最も入門的な段階として、6 級を最も高いレベルとして設定している。1 級と 2 級が初級に、3 級と 4 級が中級に、5 級と 6 級が上級に相当する。なお、同報告書は研究テーマごとに公開されている。本稿で取り上げる 김중섭他（2016）と 김중섭他（2017）も、『国際通用韓国語標準教育課程』を構成する報告書である。

ヌ」が1級、「ウサギ」と「ウシ」は2級であった。EPS 就労者であれば2級程度の語彙知識は持っていると考えられそうである<sup>9</sup>。

次に、正答率が低かった問題（問題プール番号 580）であるが、二種類の独特な尊敬語が使用されている文を聞いて、適切な応答文を選ぶ問題であった<sup>10</sup>。聞き取りの場面としては、電話による現在地の問い合わせであり、日常生活で遭遇する可能性の高い場面であると言える。外国人として生活するうえで、この種の質問に対し適切に対応できるかを問うていると考えられるが、この問題は、次に示す『国際通用韓国語標準課程』2級（김중섭他 2016:254）に示されている能力記述文に対応していることから、2級程度の難易度であると考えることができる。

#### （聴解の目標）

日常生活でよく行く場所（マート、食堂など）でよく耳にすると考えられる質問を聞き自分に関連した日常生活に関する情報を聞いて理解する。

#### （話すことの内容）

日常生活で自身に必要な情報をやり取りできる。

#### （テーマ）

交通（位置、距離、道、交通手段）

しかしながらこの問題の正答率は26.3%であり、四者択一であることを考慮するなら、インドネシア人 EPS 就労者は概してこのレベルには達していないと判断できる。

以上のことから、今回の聴解の模擬試験結果を見る限り、インドネシア人 EPS 就労者の韓国語能力は、個人による違いはあるが『国際通用韓国語標準教育課程』に照らし合わせれば、1級以上2級未満である者が多いと推察される。

## 7-2. 読解試験結果の考察

上述のように、読解試験は聴解試験に比べ平均得点が低く 67.8 点であった。また、全員が正解した問題はなかった。ただし、19名の受験者のうち17名が正解した問題、つまり正答率換算で89.5%を記録した問題が6問あったことから、これらの問題の特徴からインドネシア人 EPS 就労者ができることを確認する。また、反対に正答率が低かった4間についても確認し、彼らが苦手とすることについても示してみたい。

まず、正答率が高かった6問を項目別にみると、「事物および状況の説明」の「絵、写真を見て適切な文を選ぶ」問題が2問（問題プール番号 20、100）、「語彙および語

<sup>9</sup> ここで言う語彙知識とは、基本的な意味を知っているというレベルであり、他の語彙との微妙な意味範疇や周辺の意味までを認識しているということではない。

<sup>10</sup> 使用された語彙は、계시다（いらっしゃる）と말씀하다（おっしゃる）である。これらの語彙は、日本語の「召し上がる」、「亡くなる」のようなものといえ、通常の尊敬形の作り方と則らない形で作られているが、いずれも重要語彙であり、『国際通用韓国語標準教育課程』の付録語彙リストにおいては、いずれも1級に分類されている。

法」の「空欄に入る語彙および文を選ぶ」問題が2問(問題プール番号 280、340)、「実用資料の情報」からは「各種表示版、案内板に含まれる情報を理解する(問題プール番号 700)」と「産業安全表示版を理解する(問題プール番号 780)」に関する問題が各1問あった。

これら高い正答率を見せた問題の特徴として、次の2点を挙げることができる。1点目は基本的な語彙知識を問う問題であったこと、そして2点目は画像資料に提示されている表現を把握する問題であったことである。

まず、1点目についてみると、問われている語彙は、「眼鏡」、「七」、「日曜日」、「働く」である。それぞれ身の回りの事物名称、数字、曜日、基本的な動詞の知識を問う問題である。これらの語彙は『国際通用韓国語標準教育課程』の付録語彙リストにおいて、いずれも1級に分類されている語彙であり、このレベルの語彙については既知であると考えられる。

次に、2点目の画像資料に提示されている表現の把握であるが、紙数の関係もあるため代表的な問題のみを提示することとする(図2参照)。この問題は、調査で「したい」という回答が最も多かったものを選ばせる問題であり、左のグラフの28.8%の欄に記入された韓国語に気づけば正答の②を選ぶことは極めて容易である。②に「여행」という語彙が含まれているからである。このように表示板の内容と選択肢が一致する単純一致問題においては、正答率が高かった。なお、語彙のレベルについてであるが、『国際通用韓国語標準教育課程』2級の語彙であっても、単純一致で正答が導き出せる問題においては正答率が高かった<sup>11</sup>。

以上のことから、インドネシア人 EPS 就労者は、1級程度の語彙は理解していることが分かる。また、意味を問わずに単純一致を探せばよい問題においては、2級程度の語彙であっても対応することができるということが分かる。同じ韓国語表記のものを探し出すような作業であれば、多少難易度が高い語彙であっても対応できると推察される。これは彼らが認知能力の発達した成人であることを考えれば当然のことでもある。全体として、『国際通用韓国語標準教育課程』が示す次の1級の能力は兼ね備えていると考えられる(김중섭他 2016:239)。

<sup>11</sup> 問題プール番号 780 においては、表示板と選択肢で一致している語彙は허리(腰)という2級の語彙であったが、正答を導き出すうえで障害にはならなかったようである。語彙の一致がわかればよい問題であり、意味や用法を問う問題ではなかったためだと考えられる。



다음은 직장인들이 주말에 하고 싶어하는 일을 조사한 것입니다. 직장인들이 주말에 가장 하고 싶어하는 것은 무엇입니까? (次は会社員が週末にしたいと思うことを調査したものです。会社員が週末に最もしたいと思っていることは何ですか。)



図2 【問題プール番号 700】

### (読解の目標)

日常生活と関連した簡単な文を読み、内容を理解することができる。

次に正答率が低かった問題であるが、次の3つの特徴にまとめることができる。すなわち、複雑な語彙や文法知識を有することが前提となっているもの(問題プール番号 300、540)、文章(10文以上)を読み内容を把握するもの(問題プール番号 860)、文化的知識を問うもの(問題プール番号 940-1、940-2)である。

1点目の特徴は、難解な語彙や文法知識を有していなければ正答が難しいことである。複雑な語彙に関しては、問題プール番号 300の問題が該当するが、移動に関する複数の語彙の微妙な意味範疇の違いを区別させる問題であった。核となる語彙自体は語彙リストの1級に相当するものであるが、選択肢は語彙そのものを提示するのではなく、それぞれの語彙が意志を示す語尾と結合した形で提示され、受験者にとって難易度は高いと考えられる<sup>13</sup>。このように様々な要素が結合した形で提示があった場合、基本となる語彙自体は1級程度であっても、正答率は大幅に下がる。このことは、EPS就労者の語彙知識が基本的な語彙の代表的な意味を把握する程度にとどまっており、それらの語彙の活用形や、関連語彙との微妙な意味範疇の違いを区別するところまでには至っていないことを示していると言えよう。また、問題プール番号 540は、禁止を示す文法が出題されたものだが、提示された文法が書き言葉であるという特徴がみられた。禁止表現自体は難しいものではないが、書き言葉という日常的に文字言語に接触していないと理解が難しい文法が問われたため正答率が低かったものと推察され

<sup>12</sup> 下線は筆者による。

<sup>13</sup> 選択肢の語彙は①다니려고、②다녀오려고、③돌아오려고、④이사하려고である。それぞれ直訳すると、①通おうと、②行ってこようと、③帰ろうと、④引っ越そうと、のようになるが、これでは意味が不明である。韓国語に精通していないと区別が難しい問題である。



る。

2 点目は、長文を読むことが苦手であるという特徴である。一文であれば意味を把握することはできても、当該の一文が前後の文脈の中から意味付けられ、また次の文の文脈になるような文章読解においては得点率が低かった。語彙知識も 1 級程度であり、それも代表的な意味であれば知っているという浅いレベルにとどまっていることから、長文は認知的負担が重かったものと考えられる。860 番の問題は、依頼の手紙文であったがこれを読むことは難しいようであった。

3 点目の特徴は、言語文化的知識の不足である。韓国語で秘密を洩らさない人を「口が重い人」という慣用表現があるが、それを問う問題 (940-1) はインドネシア語母語話者にとっては難易度が高いと判断される。また、このような慣用表現を多数含む文章全体を読んだうえで文章の題名として適切なものを選ぶ問題 (940-2) は、前提となる文章の理解も難しいことから当然低い正答率となった。

以上の結果から判断すると、『国際通用韓国語標準教育課程』の次の 2 級の能力が備わっているとは言えない。テーマを持った文章を読み解くことが困難であったためである (召鏞習他 2016:239)。

#### (読解の目標)

日常生活に関連した文を読んで理解することができ、易しく簡単なテーマの生活文を理解することができる。

これらのことから、インドネシア人 EPS 就労者の韓国語読解能力は、概ね 1 級には達していると考えられるが、2 級については概して達していないと推察される。

### 7-3. 模擬試験結果から見る EPS 就労者の韓国語能力

EPS-TOPIK 模擬試験結果について、聴解と読解についてそれぞれ検討してきた。その結果、対象者は、概ね『国際通用韓国語標準教育課程』の 1 级以上 2 級未満の能力があることが指摘できた。1 級レベルは問題がないことや 2 級の語彙であれば対応できる場合も少なくないこと、受験者の中には 2 級レベルに達していると思われる者もいることから、インドネシア人 EPS 就労者の韓国語能力は概ね 2 級程度であると言えそうである。

## 8. おわりに

本研究では、韓国の外国人労働者受け入れ政策である EPS のもとで韓国に入国し就労している外国人労働者の韓国語能力を探るべく、韓国で EPS-TOPIK の模擬試験を実施し、その結果をもとに議論を行った。研究成果は次の 2 点に集約できる。

1 点目は、EPS 就労者の韓国語能力について把握できた点である。EPS 就労者を対象とした模擬試験の結果、その韓国語能力は概ね 1 級～2 級程度であることが分かった。具体的には、初級レベルの基本的な語彙の基本的な意味は知っており、文字と音

声を関係付けることもできる。生活上必須の値段を尋ねたり、時刻を聞き取ったりすることも問題がないと言える。また、短めの文章であれば内容を把握することもできることが多い。他方で、文法的に複雑さがある語彙や表現・文法には対応が難しく、やや長めの文章を読み内容を把握することも苦手であることが分かった。インドネシア人 EPS 就労者は、初級レベルの韓国語能力を身につけ、韓国で就労しているという実態が、今回の調査から見えてきた。

吹原・助川(2015)では、在日インドネシア人労働者の日本語習得について調査を行い、外国で生活し、就労していても第二言語の自然習得は起きにくいことを明らかにしている。また、同論文では在韓インドネシア人労働者の韓国語習得との比較も試み、フォーマルな学習機会の効果について述べている。そこで述べられているように、たとえ試験対策としてであっても、また極めて基礎的なレベルであっても、語学学習を行うことで語彙の仕組みに対する気づきを得たり、サバイバルすることができる韓国語能力を身につけたりすることはできている。これらの基礎的な韓国語能力があれば、辞書の使用や、未知の語彙を周囲の人に尋ねることも可能になる。そして韓国人とのコミュニケーションが可能になる。そのような経験の積み重ねは言語知識の増大、言語運用能力の向上につながっていくのであり、言語能力向上のサイクルを回すことになる。EPS-TOPIK に合格するという道具的動機づけであっても、学習経験の有無は外国人労働者の異国での生活の質の向上につながっていくと言えるであろう。

以上の EPS 就労者に対する検討結果をふまえ、現在日本でも始まっている特定技能ビザによる受け入れに関して、日本語教育の観点から言及したい。「1. はじめに」で触れた日本の特定技能は 1 号（農業や漁業、外食産業ほか 14 分野）、および 2 号（建設、造船・舶用工業のみで 1 号も可能）があるが、1 号は「ある程度日常会話ができ、生活に支障がない程度の能力」、2 号に関しては日本語能力に関して要求は「なし」である。1 号に関しては、CEFR の枠組みに沿った JF スタンドードによる A1-A2 レベルの Can-do に基づいた問題が、国際交流基金から日本語基礎テスト（JFT-Basic）としてまとめられ、法務省公認の日本語試験として採用されている（法務省 2019）。ただし、日本語基礎テストはテストの構成、およびサンプル問題を確認する限り、EPS-TOPIK のような「産業安全」や「職業関連内容」といった用語はなく、かつ国際交流基金(2020)でも紹介のある通り、内容もあくまでも「主として就労のために来日する外国人が遭遇する生活場面でのコミュニケーションに必要な日本語能力を測定し、「ある程度日常会話ができ、生活に支障がない程度の能力」があるかどうかを判定することを目的」として、「在留資格「特定技能 1 号」を得るために必要な日本語能力水準を測るテストとしても活用」されているという現状は指摘できるだろう<sup>14</sup>。また、2 号に関しても、希望者は全員 EPS-TOPIK を受験し、合格した者のみが就労できるという韓国の政策

<sup>14</sup> 本稿は韓国の雇用許可制の施策に基づくインドネシア人労働者の韓国語習得の現状を明らかにすることが目的である。このため、EPS-TOPIK と日本語基礎テスト（JFT-Basic）の詳しい比較に関しては別稿に譲る。

と比較した場合の議論の余地も残る。いずれにしても、本研究で明らかにした外国人労働者の受け入れ先進国である韓国の政策・制度と外国人労働者の韓国語習得の現状は、日本における新しい技能実習制度に関するポジティブな側面とこれから起こりうる問題を解決するための参考となる情報を与えてくれると言えよう。本研究が日本語教育の観点から、日本のこれからの多言語・多文化共生社会を見据える試みの端緒となることを期待したい。

## 参考文献

### 〈韓国語文献〉

- 김명광(2011)「국내 외국인 근로자 정책과 대안: 특수 목적 한국어 교육을 중심으로」『현대사회와 다문화』1-2、대구대학교다문화사회 정책연구소、pp. 200-225.
- 김유정(2008)「고용허가제 한국어능력시험(EPS-KLT)의 현황과 과제」『이중언어학』38、이중언어학회、pp. 95-122.
- 김의수・손현화(2011)「이주노동자의 한국어 구어 문장이 지닌 통사적 복잡성과 그 한계」『한국어학』50、한국어학회、pp. 111-140.
- 김중섭 외(2016)『國際通用韓國語標準教育課程活用点検と補完研究』、国立国語院.
- 김중섭 외(2017)『2017 年國際通用韓國語標準教育課程適用研究(4 段階)研究報告書』、国立国語院.
- 류성기(2015)「외국인 근로자들의 한국어 사용 및 발음 습득 실태와 지도 방안 - 주로 진주시 상평동 소재 회사에 근무하는 근로자들을 중심으로 -」『국제언어문화학』32、국제언어문화학회、pp. 175-202.
- 법무부 출입국・외국인정책본부(法務部出入国・外国人政策本部) 2019 年 9 月号 出入外国人人政策統計月報.
- 이미혜(2016)「고용허가제 한국어능력시험(EPS-TOPIK)에 대한 비판적 고찰」『문화와융합』38(5)、한국문화융합학회、pp. 461-486.
- 조향록(2017)『다문화 사회와 한국어 교육』、한글파크.

### 〈日本語文献〉

- 今泉慎也(2012)、“外国人労働者受け入れに関する法的枠組み—韓国と台湾の比較をてがかりに—”、山田美和編、アジアにおける人の移動の法制度、調査研究報告書、アジア経済研究所、pp.1-12.
- 国際交流基金(2020)「JFT-Basic とは」、国際交流基金。(2020 年 1 月 17 日閲覧 <https://www.jpf.go.jp/jft-basic/about/index.html#se01>)
- 佐野孝治(2010)、“外国人労働者政策における「日本モデル」から「韓国モデル」への転換—韓国における雇用許可制の評価を中心に—”、福島大学地域創造、第 22 巻第 1 号、pp.37-54.
- 吹原豊・助川泰彦(2015)、“移住労働者の言語習得を促進する要因についての一考察”、

国際社会研究、第4号、pp.21-36.

吹原豊・松崎真日・助川泰彦（2016）、「韓国の雇用許可制語学試験（EPS-TOPIK）からみた就業前の言語習得について」、国際社会研究、第5号、pp.121-140.

吹原豊・松崎真日・助川泰彦（2018）、「韓国の EPS-TOPIK についての総合的考察」、国際社会研究、第7号、pp.41-59.

法務省（2019）「新たな外国人材の受入れ及び共生社会実現に向けた取組（在留資格「特定技能」の創設等）」、法務省.（2020年1月17日閲覧

[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri01\\_00127.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri01_00127.html))

## 付記

本稿は、2019年6月に明治大学で行われた2019年度異文化間教育学会第40回大会で発表した「在韓移住労働者の韓国語能力についての考察 -雇用許可制韓国語能力試験模擬試験結果から-」（松崎・吹原・磯野・助川）を加筆、修正したものである。貴重な意見やアドバイスをくださった方々に感謝申し上げます。

なお、本稿の調査、研究は日本学術振興会の基盤研究(B)「インドネシア人のL2習得の対照的研究：日本の外国人技能実習制度と韓国の雇用許可制」（研究代表者：助川泰彦）の助成を受けて行われたものである。

（まつざき まひる・福岡大学人文学部）

（ふきはら ゆたか・福岡女子大学国際文理学部）

（いその ひではる・名古屋商科大学国際学部）

（すけがわ やすひこ・東京国際大学教育研究推進機構）